

委託事業実施内容報告書

平成24年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【地域日本語教育実践プログラム(A)】

受託団体名 JTMとくしま日本語ネットワーク

1. 事業名称 親子のための日本語教育プログラム

2. 事業の目的

日本語の支援を必要とする小・中・高校生や、その保護者達に、地域での生活や、学校生活に必要な日本語学習の場を提供するとともに、その学習教材の開発や、日本語指導者の育成を行い、彼らが社会の一員として文化的かつ自立した生活が送れるよう支援体制の充実をはかる。

3. 事業内容の概要

- ・日本語の支援を必要とする小・中・高校生を対象とした「にほんご寺子屋(子ども教室)」と称し、子どもたちがまわりの人とうまくコミュニケーションがとれるようになるための日本語指導をする。また彼ら自身が自身の持つ能力を発揮し、自己表現できる場を提供する。
- ・就学前や学齢期の子を持つ保護者を対象とした「にほんご寺子屋(親教室)」で、日本の学校制度や学校行事、日本における人とかかわり方等を理解し、社会の一員として、学校教員やまわりの人々と円滑なコミュニケーションができ、自己表現できるようになるための日本語学習の場を提供するとともに、そのための日本語テキストを作成・開発する。
- ・彼らの母国の文化的背景は母語の特徴を理解しながら、彼らが地域住民として円滑なコミュニケーションをとれるようになるための日本語指導ができる人材を育成する。

4. 運営委員会の開催について

【概要】

回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題	検討内容
1	平成24年7月7日 (土) 19:00～21:00	2時間	ぼんじゅうる	兼松文子、山満十糸子、村松幸子、加村匡子、玉置房、杜美智、森清、鴻野雅樹、辻暁子	1) 採択結果について 2) 事業計画の見直しについて 3) 予算の見直しについて	採択結果をもとに留意点について確認をした。留意点を踏まえ事業計画の見直しをした。事業計画の見直しにより予算の見直しの確認および承認を行った。カリキュラム案を複数部数入手し、活動に活かすことを確認した。
2	平成24年10月26日 (金) 18:00～20:30	2.5時間	労福協ミーティングルーム	ゲールツ三隅友子教授、兼松文子、長町順子、村松幸子、山満十糸子、玉置房、加村匡子、杜美智、森清、竹治博、谷口真弓、鴻野雅樹、辻暁子	第1回「日本語教育を行う人材の養成セミナー」について 教材作成について にほんご寺子屋について	第1回セミナーの内容について協議し、午前中は異文化コミュニケーションについての講義、午後はプロジェクトワークを行うこととした。教材作成については男性も子育てにかかわることも念頭に作成していく旨の助言があった。地域の人が生活の中で普通にしていることを織り込みプロジェクトワークにつなげていってどうかとの助言があった。
3	平成25年1月26日 (土) 17:30～19:30	2.5時間	とくさん	土屋千尋教授、兼松文子、長町順子、村松幸子、山満十糸子、玉置房、加村匡子、杜美智、森清、鴻野雅樹、辻暁子	今後の教室の運営方針について 行政との連携の仕方 大人の連携・協働 子どもの母語・母文化の保持の現状と課題	中・上級の学習者をバイリンガル指導員として活用することを考える。親子ともども学習者に(支援者としても)参加してもらうことを考える。チャンスが訪れた時にすぐに動けるように常にアンテナを張っておく。
4	平成25年3月9日 (土) 9:30～10:30	1時間	ぼんじゅうる	兼松文子、村松幸子、山満十糸子、長町順子、辻暁子、玉置房、森清、杜美智、竹治博、鴻野雅樹	1. 活動報告について 2. 予算について 3. 報告書作成について	今年度の活動報告と、現在の報告処理の進捗状況を行った。事業の予算執行状況の確認があり、謝金支払額の承認をした。今後の報告書作成の段取りと担当業務割り振りについて協議を行った。

【写真】



5. 日本語教室の設置・運営

- (1) 講座名称 にほんご寺子屋(子ども教室)
- (2) 目的・目標 ・子どもたちがまわりの人とうまくコミュニケーションをとれるようになるための日本語指導をする。また、彼ら自身が自身の持つ能力を発揮し自己表現できる場を提供する。
・日本語の支援を必要とし、就学前や学童期の子どもを持つ保護者が、社会の一員として、学校教員やまわりの人々と円滑にコミュニケーションができる日本語力習得の場や教材を提供する。
- (3) 対象者 小・中・高校生と同年齢程度の未成年
日本語の支援を必要とし、就学前や学童期の子どもを持つ保護者
- (4) 開催時間数(回数) 60 時間(うち親教室 15 時間) (全 30 回)
- (5) 使用した教材・リソース
紙芝居 徳島新聞 各種絵カード(動物 果物 野菜 等)地図 絵本 字カード カレンダー ゲーム 各種パンフレット 自作プリント DVD スライド 自作資料 日本語学級
1 はじめてのにほんご ひろこさんのたのしいにほんご かなマスター等
本事業の「日本語教育のための学習教材」で作成した「子どもと暮らすためのこんにちはとくしま」、「にほんごこれだけ」、自作プリント、絵カード、写真
- (6) 受講者の総数 39 人
(出身・国籍別内訳 インドネシア・3人 モンゴル・9人 中国・15人
フィリピン・10人 アメリカ・2人)
- (7) 受講者の募集方法
日本語、中国語、英語のチラシを作成し、JTM会員が、対象となる知人に配布した。
昨年度の文化庁同委託事業で開催した「にほんご寺子屋 親教室」に参加した学習者に郵送した。徳島県「帰国外国人児童生徒サポートシステム開発モデル事業」で配置されている学校へ先生を通して保護者へ配布した。徳島県国際交流協会のカウンターに教室開始前、数週間置いた。JTMとくしま日本語ネットワークのホームページに掲載した。

(8) 日本語教室の具体的内容

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	授業概要
1	平成24年7月1日 13:30～15:00	1.5時間	トピア大会議室	8人	中国(2人)、フィリピン(2人)、インドネシア(2人)、モンゴル(1人)、アメリカ(1人)	(全体学習)クイズを作って発表しよう	(全体学習)日本人スタッフとペアになり、みんなの面白がるような工夫をしたクイズや手品を作成し発表した。 (個別学習)個々のレベルに応じて回りの人とのコミュニケーションに役立つ日本語の学習Wをした。以下同様のため省略
2	平成24年7月8日 13:30～15:00	1.5時間	トピア大会議室	9人	中国(2人)、フィリピン(2人)、インドネシア(2人)、モンゴル(2人)、アメリカ(1人)	(全体学習)サイエンスを楽しもう	(全体学習)ゴミの再生利用をテーマにした学習
3	平成24年7月15日 13:30～15:00	1.5時間	トピア大会議室	9人	中国(3人)、フィリピン(2人)、インドネシア(2人)、モンゴル(1人)、アメリカ(1人)	(全体学習)紙芝居(英語版有り)	(全体学習)童話の紙芝居の読み聞かせと参加者による英語版紙芝居の読み聞かせ。
4	平成24年7月22日 13:30～15:00	1.5時間	トピア大会議室	12人	中国(4人)、フィリピン(1人)、インドネシア(3人)、モンゴル(3人)、アメリカ(1人)	(全体学習)徳島観光地紹介	(全体学習)夏休みに向けて徳島県全体の地図、30箇所の観光地をパンフ、チラシ配布等も含め案内
5	平成24年8月19日 13:30～15:00	1.5時間	トピア小会議室	10人	中国(5人)、フィリピン(2人)インドネシア2人)モンゴル(1人)	(全体学習)あやとりに挑戦!	①ひもを配布する。②「かまえ」の練習③「ほうき」「つりばし」など、いろいろなかたちを作ってみる。④「ねずみ」など手品にも挑戦する。
6	平成24年8月26日 13:30～15:00	1.5時間	徳島市立図書館	10人	中国(3人)、フィリピン(2人)、インドネシア(2人)、モンゴル(3人)	(全体学習)図書館見学と利用	(全体学習)館内見学のあと個人カードを作成し本を探してから借りる手続きをする。図書館の展示イベントに参加する。
7	平成24年9月2日 13:30～15:00	1.5時間	トピア大会議室	9人	中国(3人)、フィリピン(2人)、インドネシア(2人)、モンゴル(2人)	(全体学習)野菜をもっと知ろう	(全体学習)野菜に関するカードや実物を使ったり、クイズを作ったりして、野菜に関する言葉と知識を増やした。
8	平成24年9月9日 13:30～15:00	1.5時間	トピア大会議室	8人	中国(4人)、フィリピン(1人)、インドネシア(2人)、モンゴル(1人)	(全体学習)日本語の語彙を増やす	(全体学習)絵カードでいろいろな日本語の語彙を確認した後、スリーヒントのなぞなぞ形式、カード取り、チーム対抗ゲームなどで語彙を定着させると同時に親睦をはかる。
9	平成24年9月16日 13:30～15:00	1.5時間	トピア小会議室	8人	中国(4人)、フィリピン(4人)	(全体学習)①伝記読み聞かせ ②ことばクイズ	(全体学習)①一休さんの伝記読み聞かせ ②ひらがな→カタカナ→漢字に結びつけるクイズ
10	平成24年9月23日 13:30～15:00	1.5時間	トピア大会議室	10人	中国(3人)、フィリピン(3人)、インドネシア(2人)、モンゴル(2人)	(全体学習)図形遊び・スピーチ	(全体学習)いろいろな図形の名前を覚え、机の上に並べた図形を取っていく。「いつ」「どこで」「何を」「どうした」「どうだった」などを記入し、一つ一つ別の学習者が発表してつなげる。
11	平成24年10月7日 13:30～15:00	1.5時間	トピア大会議室	10人	中国(2人)、フィリピン(4人)、インドネシア(2人)、モンゴル(2人)	(全体学習)紙芝居「さるかに合戦」	紙芝居を見る前に、出てくる動物のペーパーカードを見て、動物の名前を言い合う。紙芝居を見た後で感想を聞き、果物や種の実物を見る
12	平成24年10月14日 13:30～15:00	1.5時間	バックセンター活動室	8人	中国(2人)、フィリピン(2人)、インドネシア(2人)、モンゴル(2人)	(全体学習)チャレンジことば遊び	(全体学習)楽しみながら語彙をふやす。WBに書いた濁点を忘れた手紙に濁点をつけ、正しい手紙にする。
13	平成24年10月21日 13:30～15:00	1.5時間	トピア大会議室	8人	中国(2人)フィリピン(3人)インドネシア(2人)	(全体学習)徳島には、秋にどんな野菜や果物ができますか。	(全体学習)野菜では、「鳴門きんとき」として有名なさつま芋やれんこん、大根やにんじん、果物では、柿や栗、みかんなど、実物や絵、写真で徳島の産物を知る。果物の名前を使ってゲームをする。
14	平成24年10月28日 13:30～15:00	1.5時間	トピア小会議室	9人	中国(3人)、フィリピン(3人)、インドネシア(1人)、モンゴル(2人)	(全体学習)ことばあそび「しりとり」	(全体学習)絵本でしりとりゲームを教え絵を提示して語彙を増やす。実際に知っている単語でゲームをする。大型絵本を使って読み聞かせをしながらしりとの楽しさを知る。
15	平成24年11月4日 13:30～15:00	1.5時間	トピア大会議室	11人	中国(1人)、フィリピン(5人)、インドネシア(3人)、アメリカ(1人)、台湾(1人)	(全外学習)防災用語をいろいろ覚える。 避難場所、災害時の行動について学ぶ	(全体学習)絵カードでいろいろな防災用語を学習したあと、ゲームなどで語彙を定着する。その後、イラストを使い、災害時に避難する場所、行動などを確認し、実際に言葉で、一斉確認する。(高い所に逃げる。机の下に入る、など)
16	平成24年11月11日 13:30～15:00	1.5時間	トピア小会議室	9人	中国(3人)、フィリピン(3人)、インドネシア(1人)、台湾(1人)、モンゴル(1人)	(全体学習)防火について	(全体学習)防火標語と火災原因の説明。アニメ「こぎつねの消防隊」の観賞
17	平成24年11月18日 13:30～15:00	1.5時間	トピア大会議室	9人	中国(3人)、フィリピン(2人)、インドネシア(2人)、モンゴル(2人)	(全体学習)防災出前講座	(全体学習)県国際交流協会の人によって、パワーポイントによる地震・津波の起こり方、被害の状況、身の守り方などの画像を見る。見た後で質問をし、観想を言う。防災グッズも見る。
18	平成24年11月25日 13:00～16:45	1.5時間	トピア小会議室	7人	中国(4人)、フィリピン(2人)、アメリカ(1人)	(全体学習)台風	(全体学習)①台風についてのお話 ②紙芝居・台風二話
19	平成24年12月2日 13:00～16:45	3.75時間	県立防災センター	12人	中国(3人)、インドネシア(6人)、モンゴル(1人)、アメリカ(2人)	(全体学習)防災センター見学と体験	(全体学習)地震、火災消火、煙、暴風の各体験をしそのあと英語字幕のついた津波の防災ビデオを見る。体験したことを絵や感想文で表す。
19	平成24年12月2日 13:30～15:00 親教室	1.5時間	トピアロビー	8人	中国(2人)、フィリピン(2人)、モンゴル(4人)	(主)道を探ねて学校へ行くことができる。学校のお便り文がわかる。 (初心者)動作に対する質問を理解し、答えることができる。	(主)オリエンテーション。道を探ねて、間違えずに目的地へいくことができる。授業参観/家庭訪問のお便りを理解し、記入してすることができる。漢字ミニテスト (初心者)朝何を食べたか/飲んだか。果物で/野菜で何がすきかなどを聞いたり、応えたりすることができる。
20	平成24年12月9日 13:30～15:00	1.5時間	トピア大会議室	5人	中国(3人)、フィリピン(1人)、インドネシア(1人)、モンゴル(1人)	(全体学習)防災月間の総まとめ	(全体学習)11月にわたり、テーマを細分化して防災知識を学び、前回は県立防災センター訪問を行った。これまでの防災学習の総まとめとして、防災知識の総復習を行った。
20	平成24年12月9日 13:30～15:00 親教室	1.5時間	トピアロビー	2人	モンゴル(2人)	買い物をする	仕事、国などについて尋ねたり、答えたりすることができる。

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	授業概要
21	平成24年12月16日 13:30～15:00	1.5時間	トピア小会議室	9人	中国(1人)、フィリピン(5人)、インドネシア(1人)、モンゴル(1人)、アメリカ(1人)	(全体学習)お楽しみ会	(全体学習)学習者の名前をWBに貼り、日本の文字(ひらがな、カタカナ、漢字)で表せることを知り、その後、「あいうえおさいころ」を用いて時間内にできるだけたくさん単語を作成。数の多い人から順にプレゼントを選んだ。
22	平成24年12月23日 13:30～15:00	1.5時間	トピア大会議室	9人	中国(2人)、フィリピン(2人)、インドネシア(3人)、モンゴル(1人)、アメリカ(1人)	(全体学習)お正月	(全体学習)①楽しいお正月(紙芝居)とお正月・干支(えと)・年賀状作成の説明 ②年賀状作成作業、投函
22	平成24年12月23日 13:30～15:00 親教室	1.5時間	シビックセンター活動室	4人	中国(3人)、モンゴル(1人)	(主)買い物ができる。買った物を取り替えることができる。	(主)子供が学校で使うものを買ったり取り替えたりする表現の学習。学校からのお便り(更衣、給食試食会の申し込み)を理解する。漢字ミニテスト
23	平成25年1月6日 13:30～15:00	1.5時間	トピアロビー	8人	中国(3人)、フィリピン(2人)、インドネシア(2人)、モンゴル(1人)	(全体学習)日本のお正月	(全体学習)年の暮れから正月にかけての行事をPowerPointを使って説明
23	平成25年1月6日 13:30～15:00 親教室	1.5時間	シビックセンター活動室1	4人	中国(2人)モンゴル(2人)	(主)用件を電話で連絡することができる。(初心者)日常の基本的な動作が説明できる。	(主)子どもが体調不良のために、学校を休ませることを電話で連絡する内容の会話練習をした後、電話を使って、先生に連絡する練習をする。病院へ行って病気の症状を言う。(初心者)動詞の絵カードを使って1日のいろいろな動作を表現する。また1日のスケジュールをたてる。電話連絡の表現を知る。
24	平成25年1月13日 13:00～16:45	1.5時間	トピア小会議室	10人	中国(4人)、フィリピン(1人)、インドネシア(3人)、モンゴル(2人)	(全体学習)日本の中の徳島の位置を確認する。徳島の観光地や名所を知り、興味を持ってもらう。	(全体学習)地図で徳島県、徳島市の位置を覚える。その後、いろいろな徳島の観光名所のパンフレットの中から興味のある場所を選び、場所名、何がでるか、どこへいきたいか、などを考え、発表する。発表したことをフォームに書いてまとめる。
24	平成25年1月13日 13:30～15:00 親教室	1.5時間	シビックセンター活動室3	4人	中国(2人)、モンゴル(2人)	(主)わからない言葉が尋ねられる。(初心者)住んでいるところについて説明できる。	(主)学校の年間スケジュールについての理解。「夏休みのくらしについて」を読み、わからない言葉を担任に尋ねる表現の学習。漢字ミニテスト(初心者)住んでいるところについての説明の表現の学習。「から～まで」「～より～ほうが～」。
25	平成25年1月20日 13:30～15:00	1.5時間	トピアロビー	9人	中国(3人)、フィリピン(1人)、インドネシア(3人)、モンゴル(1人)、アメリカ(1人)	(全体学習)徳島ご当地クイズ	徳島ご当地クイズを読みながら答えさせる。答えの場所やものの写真や絵を見せる。
25	平成25年1月20日 13:30～15:00 親教室	1.5時間	シビックセンター活動室3	4人	中国(2人)、モンゴル(2人)	(主)人に物事を頼む。地震、それに関する言葉を知る。(初心者)旅行について、尋ねたり、答えたりすることができる。	(主)子どもの忘れ物を学校の先生に頼むことができる。地震について、何が起こるか、どうしたら良いかを考える。地震に関する言葉を学習する。漢字ミニテスト(初心者)何処へ行ったか、行きたいか、だれと行ったか、どうだったかなど形容詞を使い言う学習をする。
26	平成25年1月27日 13:30～15:00	1.5時間	トピア小会議室	9人	中国(4人)、フィリピン(2人)、インドネシア(1人)、モンゴル(1人)、アメリカ(1人)	(全体学習)徳島のおみやげを調べて人にすすめてみよう	(全体学習)駅ビルの中のお土産屋さんを調べ、東京に帰るお客さんに実際に提案した。
26	平成25年1月27日 13:30～15:00 親教室	1.5時間	シビックセンター活動室3	4人	中国(3人)、モンゴル(1人)	(主)気になることを確認する。学校からのお便り「気象警報発令時の対処について」「秋季大運動会のご案内」がわかる。	(主)学校の先生に電話で確認することができる。いろいろな気象警報を知る。発令時の学校の対処を理解する。日本の運動会を知る。これらに関する言葉を聴いて理解できるようにする。漢字ミニテスト
27	平成25年2月3日 13:30～15:00	1.5時間	トピアロビー	9人	中国(4人)、フィリピン(1人)、インドネシア(1人)、モンゴル(2人)、アメリカ(1人)	(全体学習)①福笑い②節分	(全体学習)①福笑い②節分豆まき
27	平成25年2月3日 13:30～15:00 親教室	1.5時間	シビックセンター活動室3	3人	中国(2人)、モンゴル(1人)	(主)他の保護者からの誘いをうまく断ることができる。(初心者)季節にかかわる形容詞の意味が分かる使える。日本の祝日を知る。	(主)節分からの流れで 方角の言い方、日本の地域の言い方を学ぶ。「せっかく～のに」を使い誘いを断る言い方を学ぶ。漢字ミニテスト(初心者)季節の絵カード、本に描かれている絵を見て四季をモンゴルとくらべる。各季節の形容詞の意味の違い(暑い/暖かい、寒い/涼しい)、気温の言い方、モンゴルと日本の季節違いを比べる。日本の祝日について知る。
28	平成25年2月10日 13:30～15:00	1.5時間	トピア小会議室	9人	中国(3人)インドネシア(2)フィリピン(2人)、モンゴル(2人)	(全体学習)日本の四季、ソロ演奏、歌う	学校の行事、楽しいことの発表、お母さんの歌ソロ、「世界の子供のマーチ」を全体で歌の練習
28	平成25年2月10日 13:30～15:00 親教室	1.5時間	シビックセンター活動室	2人	中国(2人)、モンゴル(2人)	(主)病院で、医者に症状を伝える事ができる。学校からのお便り文が分かる。(初心者)自分の買いたい物やしたいことが言える。	(主)病院で症状を伝えて診察を受けることができる。薬局で薬を受け取ることができる。問診表に記入できる。インフルエンザについてのお便りが理解できる。漢字テスト(初心者)お金があつたら何を買いたい、いろいろなイラストを見ながら答える。日本と出身国の物産を比べる言い方を学ぶ。
29	平成25年2月17日 13:30～15:00	1.5時間	トピアロビー	9人	中国(5人)、フィリピン(1人)、インドネシア(1人)、モンゴル(1人)、アメリカ(1人)	(全体学習)春に咲く花に触れたり、嗅いでみよう。	(全体学習)桜、梅、水仙、桃、桜。それぞれの特徴と、伝説と昔話。それぞれの、花言葉を交えて学んだ。
29	平成25年2月17日 13:30～15:00 親教室	1.5時間	シビックセンター活動室3	3人	中国(2人)モンゴル(1人)	(主)家を訪問したときのマナーやことば。「郵便」に関することを知る。(初心者)「好きなものいろいろ」	(主)家を訪問したときのマナーやことばを会話文で学ぶ。「郵便」に関することを絵カードや実物で知る。また、往復はがきの返事を書く練習をする。(初心者)「好きなもの」について、絵カードなどを使って「何が一番好きか」「どちらが好きか」など尋ねたり、応えたり練習をして使えるようにする。
30	平成25年2月24日 13:30～15:00	1.5時間	トピアロビー	10人	中国(4人)、フィリピン(1人)、インドネシア(1人)、モンゴル(1人)、アメリカ(1人)	(全体学習)他の人に春に関することを聞いて、皆に伝えよう	(全体学習)スタッフの人たちに、春に関する思い出、風物、好きなものを聞いてメモし、ひとり一人の前で発表する。

(9) 特徴的な授業風景(2～3回分)

(子ども教室)

徳島をテーマとした学習の月

野菜、果物の実物や絵カード、写真を使い徳島の特産品を教える。(鳴門金時 れんこん 大根 人参 すだち 梨 みかん 柿 栗)などの野菜や果物の名前が言えるようになり、徳島の特産品を知ることができた。果物、野菜の名前を使った名前当てゲームやフルーツバスケットなどのゲームでそれらの定着を図った。また、グループ対抗のゲームをして仲間同士のコミュニケーションをとれるようにした。

防災をテーマとした月

絵カードでいろいろな防災用語(地震・津波・火事・洪水・台風・暴風・土砂くずれ・雷・竜巻豪雨)と擬音語(ビュービュー・ごーごー・ボーボー・ぴかぴかなど)を繰り返し言って覚えカードを取ってそれに関する災害名を言うゲームをした。次に災害時に避難する場所(学校・校庭・公園など)、行動(逃げる・エレベーターに乗らない・机の下に入る・頭を守る・なるべく高い所に登るなど)を確認し机の下に入るなどの実演もした。



(個別学習)



(全体学習)



(防災センター体験学習)

(親教室)

徳島駅前にあるシビックセンターの活動室で行なった。教室は少人数に最適の会議室で照明、空調ともに行き届いていた。教室となった活動室があるフロアは、静かで落ち着いて学習ができた。教師はホワイトボードを使用し、学習者にはホワイトボードを中心に向かい合って、座ってもらった。そうすることで、学習者が構えることなく発言ができる雰囲気を作りし、また学習者どうし、お互いにコミュニケーションをとりやすいようにした。教師は、絵カード、写真等を多く使い分かりやすい授業を心がけた。学習語彙は、学校に関する言葉が多く、日常耳にすることが少ないが、理解できないと困る語彙が多く出てきた。そこで、毎回、教師が重要だと思う進出語彙を選び宿題を出し、次の授業で漢字テストを行なった。



(10) 目標の達成状況・成果

(子ども教室)

徳島をテーマとすることで自分の住む町に興味を持つことができ、身近な食べ物の名前を知ることができた。果物や野菜の絵カードは折に触れ、特にゼロレベルの子どもを対象に利用しているがゲーム感覚で楽しく覚えることができています。また特産品だけでなくみやげ物などを見せることで徳島の観光についての知識も深まってきた。

防災用語の学習はその後の防災センターでの体験をより効果的にすることができ、防災

センターを終えた後の感想文では、それぞれが自分のこととして防災の意識を身につけたと思われる文章が書かれていた。

(親教室)

今回、親教室へ通ってきた学習者の子どもの年齢はまちまちであるが、既に学校に通っている子どもを持つ親は、母国での常識から外れたことや、今まで知らなかったことを学ぶと、驚きの声を上げていた。「インフルエンザにかかったら病院に行ったほうが良いですか。」という質問には教師のほうが驚いたが、病院に行き、学校は必ず休ませ、登校するときは病院の治癒証明がひとつようなことを説明した。やはり驚いていたが、この驚きや学びが学習者にとって、日本での学校教員やまわりの人々と円滑暮らしていく上で重要になっていくのだと思う。また、多くの学習者たちは、「子どもから、日常的にいろいろな学校に関することを質問されるが、答えることが出来ないし、どこで、誰に聞いたら良いか分からない。」と不安に思っているようだ。この親教室が開講中は、毎回そういった多くの質問に答えてきた。例えば、「先生、“せき”って何ですか。」とある学習者が聞いてきたのは、「席」でも「咳」でもない加減乗除の乗の答えを意味する「積」だった。

また、就学前の子どもを持つ親も、この教室に参加し、日本の学校を知ることによって抱えている不安を和らげることが出来たようだ。「来年度から、小学校に行くけど、学校のことをだいたひ勉強したから、大丈夫！」と笑って話してくれた。

日常の日本語の支援が受けられるところはあるが、就学前や学童期の子どもを持つ保護者が、日本の学校のことや配布されるお便りや子育てに関することを学べるところはまだまだ少ない。そういった意味で、今年も学習者たちは、子育てや学校に関する多くのことを習得できたと思っている。

(11) 改善点について

(子ども教室)

参加者の年齢幅や、日本語習得のレベル差が大きいのでどのあたりにポイントを絞るのが難しい。準備していたものが幼すぎたり、逆に難しすぎたりすることが時々あった。また、参加人数が日により変動し予測できないためスタッフの人数調整がうまくいかない時もあった。今後はある程度事前に出席確認を取るなどの対策を考え、参加者に適した授業を開催し適当なスタッフ数を確保していく必要がある。

(親教室)

今回は、本事業の「日本語教育のための学習教材」で作成途中の「子どもと暮らすためのこんにちとはとくしま」を使用した。内容は充実していたが、作成した教師たちの「学校に関するいろいろな情報を伝えたい」という思いが強いために、1回、1時間半の授業時間では時間が足りないこと多かった。これからこの本を使用する場合、時間を広げるか、教えるものを絞り込むかの選択が必要だと思う。

次に、小さい子どもを持つ親のために託児も設けたが、それでも、やはり学習者の申し込みが少なかったということは昨年に引き続き改善すべきところだ。広報活動はもっとマスコミ等を使ったものも考えていかなければならないのだろうか。

しかし、申し込んで来た学習者の定着率は昨年度より良かった。定着率が良かったのは、昨年は月に1回の講座だったが、今年は週に一回開催したことが定着率につながったように思う。

散在地域である徳島で、多くの学習者を集めるのは容易なことではないが、良い授業を心がけ、長く活動することではないだろうか。

6. 日本語教育を行う人材の養成・研修の実施

(1) 講座名称

日本語教育を行う人材の養成セミナー

(2) 目的・目標

日本語の支援を必要とする子どもや保護者の母語の文化・習慣を理解するとともに、日本での生活にスムーズに適応できるための日本語指導ができる人材、また日本事情の理解を促すことができる人材を養成する。

(3) 対象者

地域で外国にルーツを持つ子どもたちやその保護者たちの日本語支援に関わっている人または、関わる予定のある人。

(4) 開催時間数(回数) 12 時間 (全 2 回)

(5) 使用した教材・リソース

第 1 回・・・PP スライド、新聞記事、マンガ素材、絵本素材

第 2 回・・・PP スライド、DVD 映像

(6) 受講者の総数 55 人

(出身・国籍別内訳 日本 55 人)

(7) 受講者の募集方法

徳島県や徳島市の教育委員会、各地域の国際交流協会に後援を依頼し、チラシ作成後、後援の許可のあった団体にチラシを配布し募集のお願いをしたり、地元新聞の情報欄に掲載依頼を行った。

(8) 養成・研修の具体的内容

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	授業概要	講師又は指導者数	講師又は指導者名
1	平成24年11月17日 9:00～16:00	6時間	ヒューマン わーくびあ徳島	25人	日本人(25人)	異文化コミュニケーション・プロジェクトワーク	午前・・・日本語教育のための異文化理解 午後・・・プロジェクトワーク・タスクワークの実践	1名	三隅友子
2	平成25年1月26日 9:00～16:00	6時間	ヒューマン わーくびあ徳島	30人	日本人(30人)	午前・・・講演 午後・・・グループ討議	午前・・・外国につながる子どもを取り巻く環境と問題点、散在地域の実態などの講演 午後・・・(僕の中のふたつの国)ビデオを視聴後、支援者に何を望んでいるかについてグループ討議	1名	土屋千尋

(9) 特徴的な授業風景(2～3回分)

第 1 回・・・コックとして来日した中国人一家とその子どもが通う保育園での出来事を描くマンガ「プッチコホーム」を題材に、参加者ひとり一人が別々の登場人物(中国人の父、子、保育士、日本人の父、子)になって読み、その人物になって話し合った。そうすることで、誰も悪い人はいないのに、思いがずれていくことがわかり、コミュニケーションを取ることの難しさを感じることができた。

第 2 回・・・「カラフルー僕の中の二つの国ー」という 10 年前に日本にやってきた日系ブラジル人の家族の話を中学 2 年生のビクトル君が語るというビデオ視聴後、4、5 人のグループに分かれて、討議を行った。ビクトル君の立場にたって考えることにより、家族の中でいちばん日本語がじょうずな子どもが、自分の家族と日本(学校、職場、近隣)との橋のような存在となり、日本の中で生きていこうとする姿が心に残り、また、その支える物の大きさが実感として感じられた。



(第1回)



(第2回)

(10) 目標の達成状況・成果

セミナー当日にアンケートを配布し集計した。その結果を見ると、第1回第2回とも、日本で生活する外国人への理解が深まったことがわかり、支援を継続していく意志を確認できた。

(11) 改善点について

今回は、講演を聴いたり、話し合ったりすることが中心だったので、来年度は、実際に教室で行う具体的な支援方法を学べる研修としたい。

7. 日本語教育のための学習教材の作成

- (1) 教材名称 子どもと暮らすためのこんにちはとくしま
- (2) 対象 就学前や学齢期の子を持つ保護者
- (3) 目的・目標 就学前や学齢期の子を持つ保護者が、日本の学校制度や学校行事、日本における人とのかかわり方等を理解し、社会の一員として、学校教員やまわりの人々と円滑なコミュニケーションができ、自己表現できるようになるための手助けとなる日本語テキストを作成・開発する。
- (4) 構成

導入ページ：テキスト紹介、登場人物紹介

情報ページ：学校のしくみや学校に関する行事、道具などの説明、阿波弁講座

本課：1課～12課で、会話と練習問題（会話・練習）＋通知文の読み書き（読む・書く）またはタスク式生活情報（生活を知ろう）の2部構成
- (5) 使い方

本課を柱に、必要に応じて情報のページを織り交ぜ、理解を助ける。なお、情報ページ、本課の「会話・練習」、「読む・書く」、「生活を知ろう」は異なる課で組み合わせても可。

本課

会話・練習：①会話のトピックへの意識付け②会話の場面設定、ロールプレイに挑戦③ことばや表現の説明、練習④会話の定着

読む・書く：ルビをつけていないので、必ず副教材としてルビ付きのものを用意しておく。まずルビなしでどれだけ理解できるかを見たのち、次にルビ付きのものを提示し、全文を導入するのではなく、読み取りに必要なキーワードを示し、大意を読み取る練習をさせ

る。学校で頻度の高い提出物の記入の仕方を練習させる。

生活を知ろう:トピックに意識付けさせたのち、ことばの意味理解を促し、タスク練習をすることで、実生活を疑似体験することにより生活に必要なことばや情報を習得させる。

- (6) 具体的な活用例 4課 ①年間スケジュールを示し、夏休みに入るというトピックに意識付けをする。②会話例を提示③語彙・表現の確認、練習④読む・書く「夏休みについて」を読んでもみる＝ことばがわからないという状況にアプローチし、会話例をもとに、尋ねる際の日本語表現を実践すると同時に、子どもたちの安全な生活に必要な情報、ことばを理解する。

- (7) 成果物の添付 別添

8. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的

日本語の支援を必要とする小・中・高校生や、その保護者達に、地域での生活や、学校生活に必要な日本語学習の場を提供するとともに、その学習教材の開発や、日本語指導者の育成を行い、彼らが社会の一員として文化的かつ自立した生活が送れるよう支援体制の充実をはかる。

(2) 目標の達成状況・事業の成果

にほんご寺子屋では生活に密着した日本語の習得に成果があったことが、子どもたちの感想文や行動から手にとれた。防災センター見学後の感想文では、自然災害の多い国で暮らすことの自覚や自分で命を守ることの大切さを学んだことが絵と文で表現されていた。後日、まとめの授業を受けたときも、子どもたちは、たいへん真剣に防災のキーワードを覚え実践していた。言葉を覚えることや体験することを通して、防災に対する意識が自分自身の問題として具体的により現実味を帯びてとらえられるようになっていた。また、図書館の見学では、その後、図書館を個人的に利用して本を借りている子どもがいた。

親教室は、昨年度の月1回開催であったが、今年度は12月から週1回の講座を10回、集中的に開催したことにより、学習者の定着につなげることができた。

日本語教育を行う人材の養成・研修の取り組みでは、2回にわたり計12時間のセミナーを実施した。第1回セミナーは、「日本語の支援を必要とする子どもや保護者の母国の文化・習慣を理解するとともに、日本での生活にスムーズに適応するための日本語指導ができる人材、また日本事情の理解を促すことができる人材を養成する」ことを目的に開催した。事後のアンケートでは、「日本に住んでいる外国人の気持ちになって考えることの大切さを改めて知った」「異文化理解はばく然とわかっているつもりだったが、もっと具体的に異文化理解とは何か、いちばん大切なことは何か、妨げとなるものは何かなど明確に考えることができた。」など、所期の目的を達成する回答が多くあった。さらに、学んだことを「にほんご寺子屋」の取り組みに活かしていきたいという意見も複数あった。

また、第2回セミナーは、『生活者としての外国人』である保護者(主として日本人配偶者)の日本語能力が、いかに子どもの日本語能力に影響を及ぼすかを理解し、保護者と子どもたちの日本語支援を一体的・効果的に進めていくために必要なことについて研修するとともに、

母語・母文化の保持について、日本語支援者としての心構えやできることを学び、よりよい支援につなげることや、先進地域における支援体制について学び、徳島における来日直後からの支援体制の構築に活かす」ことを目的に開催した。事後のアンケートからは、「母語の重要性は分かっていたが、母語をしっかりと身につければ第二言語も覚えやすい(身につけやすい)」ということが印象に残った」、「他県の日本語教育、学校の様子を知ることができ、よかった。また、家庭内で子どもと、どの言語で話せばいいか、ということも興味深かった。」等、母語保持の重要性や他県での取り組みが参考になったという意見が多数あった。セミナーは前半の講演と後半のグループ討議の2部構成であったが、特に前半の講演は「特によかった」「よかった」と回答した人の合計が100%であった。

教材作成においては、編集過程の教材を実際ににほんご寺子屋親教室で試用したことにより改善点の把握ができ、よりよい教材作成につなげることができた。

以上のように、教室運営、研修開催、教材作成の3つの取組みを行ったことで、セミナーでの学びを教室運営に活かしたり、教材のモニタリングを親教室で行い推敲したりするなど、取り組みを連動させることができたことにより、いっそうの成果につなげることができた。

(3) 標準的なカリキュラム案の地域での活用について

教材作成では、『『生活者としての外国人』に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案』から、I-01「医療機関で治療を受ける」、I-01-02「災害に備え対応する(地震)」、IV-07-10「公共交通機関を利用する(バス)」、Ⅷ-15-34「住民としてのマナーを守る(ゴミの分別)」、X-21-45「郵便宅配を利用する」を取り上げ、「生活を知ろう」と題して、各項目を2ページずつ作成した。原稿作成時には、『『生活者としての外国人』に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案』を大いに参考した。通常の日本語の教科書にはない、生活には不可欠な情報が具体的に盛り込むことができたので、学習者たちには好評だった。親教室では、その作成した教材を使用し学習した。

『『生活者としての外国人』に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案』教材例集には、絵、写真、言葉、表現が具体的に示されていたので、教材作成時には取り上げなかった他の項目、例えばI-01-02「薬を利用する」では具体的な薬の形状、頻度等の説明に使用した。

学習者も今まで分からなかったことや、今更聞けないことを、分かりやすく学ぶことが出来て良かったと好評だった。

子ども教室では、『『生活者としての外国人』に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案』のⅨ「自身を豊かにする」を参考に、地域の公共機関や図書館へ行った。自分の図書カードを作り、本を借りるという経験を通し、日本での情報の得方を知ったり、システムや公共の場でのマナーを理解したりした。また、課外授業として、防災センターを見学した。現地集合解散とすることもできたが、引率する日本語教師はIV-07「公共交通機関を利用する」の活動の目標などを参考にし、教室で集合し、バス乗って防災センターへ移動した。実際、公共機関を利用することで駅名、行き先などの駅やバスの表示などを理解することができた。また、I-01-02「災害に備え対応する(地震)」を参考に事前学習をし、防災センターでは、体験学習を通して、防災に関する日本語や知識を身に着けることができた。学習者たちは貴重な体験ができたと喜んでいて。

今回この『『生活者としての外国人』に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案』を使用して、授業で学習者に教えるときは、項目によっては事前に地域の事情(我々の場合

は徳島)をよく調べて、出来れば具体物等も用意をしておくというのを学んだ。例えば、Ⅷ-15-34「住民としてのマナーを守る(ゴミの分別)」等は、同じ徳島県内でも、分別の仕方に違いがある。学習者の居住地にあった正確な情報を収集し、自治体が出しているパンフレット等も用意することが大切である。

(4) 地域の関係者との連携による効果、成果 等

<徳島県教育委員会>

研修開催や教室運営においては、2009 年度より県教育委員会の後援をいただき実施してきたが、今年度は県教委との協働事業や委託事業を実施していることもあり、後援はもとより、第1回および第2回「日本語教育を行う人材の養成セミナー」の案内も県教委から自治体教育委員会や学校にさせていただくことができた。

また昨年度は、県教委主催の「あわ(OUR)教育発表会」において、ブースを出展し、本事業ははじめ当会の活動を学校関係者に知っていただく機会を得たが、12 月 24 日に開催された今年度の「あわ(OUR)教育発表会」では、各学校と同じくポスターセッションにおいて取り組みを発表する機会をいただき、文化庁委託事業に採択されたことが一つのきっかけとなり、県教委との連携が大きく前進したことを学校関係者に紹介することができた。さらに、12 月 11 日には、県知事に子どもたちのサポートシステム構築を要望するための意見交換会が実現し、県教育委員会、大学、県国際交流協会、学校関係者等が一堂に会し、当会からも代表はじめ4名が出席し、学校と地域の連携による子どもたちの支援の必要性を訴えることができた。そして、3 月 6 日に文科省国際教育課より県教委への視察が行われた際には、同課係長と県教委指導主事が当会事務局を訪問し、学校と地域の連携による支援の仕組み構築や今後の方向性、施策への提言等について当会会長と 1 時間半にわたり意見交換を行った。

以上のように、今年度は県教委との連携が大きく前進した1年であり、学校現場だけではなく、地域生活に密着した日本語学習支援を地域の支援者が行うことで子どもたちのよりよい支援につながるという理解が教育行政関係者からも得られた。

<学校関係者>

県教育委員会から学校関係者へのセミナーの案内による初めての参加者があった。

<地域の日本語支援団体>

セミナー開催時に地域の国際交流協会や団体に後援をいただき周知にも協力をいただくとともに、参加申し込みも得られた。

<(財)徳島県国際交流協会>

2005 年度より毎年、協会から委託を受けて実施している「サマースクール(夏休み子ども日本語教室)」では、「にほんご寺子屋」との双方向の情報発信・共有により、参加者が増え、その結果、開催日数がこれまでの6日間から8日間に増えるとともに予算も拡充され、日本語に触れる機会が少なくなる長期休暇期間の学習の充実につながった。また、11 月 18 日には「にほんご寺子屋」において、同協会が実施している「防災出前講座」を行い、地震や津波から身を守る方法を学んだり、防災グッズを手にとってみたりして、防災意識を高

める取り組みを行った。

(5) 改善点, 今後の課題について

外国につながる子どもたちの支援は、ひとりひとりの子どもたちに今、必要な日本語支援を行うことが大切である一方で、子どもたちの将来を見据えた取り組みとすることが重要である。今後は、「生活者としての外国人」のための日本語教育の一環として、企業との連携の可能性も探りながら、職場体験学習などもとり入れた日本語支援を行うなど、自立した大人に成長できるよう職業意識を醸成することも視野に入れた支援を行うことが重要であると考ええる。

また、よりよい支援のためには人材育成が喫緊の課題であるが、県下各地の国際交流協会や日本語支援団体にセミナーの案内を行っているものの、じゅうぶんな参加には至っていない。今後、他団体と日本語教育に関する情報・知識を共有していくための働きかけにさらに工夫が必要であると考ええる。

(6) その他参考資料

第1回および第2回「日本語教育を行う人材の養成セミナー」アンケート集計結果を添付